

鈴木琵琶子(鈴木大拙夫人)の「京洛逍遙」について—その1

On “Rambles in Ancient Kyoto” by Beatrice Lane Suzuki (Mrs. Daisetz T. Suzuki)—part 1

上田卓爾
Takuji UEDA

(要約)

金沢には鈴木大拙館もあり、金沢ふるさと偉人館もあって、禅や仏教に対する興味はともかく鈴木大拙の名は、一応知られていると言って良いであろう。ところが、夫人である Beatrice Lane Suzuki (日本名 鈴木琵琶子) については、大拙の著作に関しての協力者として挙げられている程度で、世に出ている著作も少ないことからその知名度は極めて少ない。遺憾なことである。本研究では新たに発見した彼女の京都ガイド、Rambles in Ancient Kyoto (日本語訳「京洛逍遙」) を紹介するとともにそのガイドブックとしての特性およびそれをインバウンド・ツーリズムに生かす方策を探ろうとするものである。

(キーワード)

鈴木大拙, 鈴木琵琶子 (Beatrice Lane Suzuki), 雑誌ツーリスト

1. はじめに

星稜女子短期大学(現 金沢星稜大学女子短期大学部)に奉職したのは平成22年4月であった。着任するとすぐに金沢の歴史・文化に馴染むべく、積極的に文化施設を訪れたものである。鈴木大拙館はまだできていなかった¹が、鈴木大拙の夫人が琵琶子という日本名であったのを知ったのはそのころであった。恐らく三文豪²の記念館で見かけたパンフレットであったと思われるが、その中に「庭木を移植するという話が出た際に大拙が『それは琵琶子の好きだったものだから』と言って結局移植をさせなかった」という逸話が載っており、その時は Beatrice で琵琶子さんか、という感じを持っただけであった。新たな調査で判明した逸話には「割れた急須の蓋の接着剤がないか請われて、新しいものを買うことを勧めたり、京都から大拙の好みそうなものを送る、と言った際に『これがなあ、琵琶子がとてもよろこんでいたもんだから…』と言った。」と言うものもある³。鈴木大拙は『「琵琶」はビアトリスの声音をとる、自らの日本名として平常これを用いたり。』としている⁴。

その後、別の研究資料の調査中にJTB財団の「旅の図書館」で雑誌「ツーリスト」の目次を検証していた際、英文欄の執筆者に「鈴木琵琶子」があるのを偶然発見した。記事をチェックしたところ、まさに鈴木大拙夫人の著した記事で、銀閣寺を始めとする京都の寺院が詳しく紹介されたものであった。ほぼ同時期に発行された『日本案内記』や

日本で発行された英文ガイドブック、現代のロンリープラネット、ミシュラン・グリーンガイドの記述内容と比べてみると、量・質ともに遥かに凌駕しているものであることが判明した。本研究においては単なる作品紹介でなく観光学の立場からガイドブックのあり方として紹介してみたい。

2. 鈴木琵琶子に関する資料について

新聞社データベース等では読売新聞に1件(訃報⁵)、朝日新聞に3件(うち1件は訃報)、の記事しか得ることができなかった。朝日新聞の残る2件は1件が大阪朝日の「大乘仏教の魅力 私はなぜ仏教徒になったか 鈴木ビアトリス」という寄稿の翻訳であり、もう1件が「ルンペン犬の天国」と題するビアトリス夫人経営の犬の保護施設の話である。従って経歴は主として鈴木大拙に関する資料に拠るものとする⁶。



Beatrice Lane Suzukiは旧姓 Beatrice Erskine Lane, 1878年ボストン生まれ、ラドクリフ・カレッジ卒業後コロンビア大学で社会学専攻、修士。1911(明治44)年12月12日横浜で鈴木大拙と結婚⁷。大正10(1921)年より大谷大学教授(予科、実用英語と比較宗教学の原典

講義⁸)。同年東方仏教徒協会 (Eastern Buddhist Society) 設立。1939 (昭和14) 年7月16日聖路加病院にて逝去。

主著⁹① *Nogaku; Japanese no plays*, (The wisdom of the East series), John Murray, 1932, ② *Impressions of Mahayana Buddhism*, (The Ataka Buddhist Library; 10), The Eastern Buddhist Society, 1940, ③ *Mahayana Buddhism*, D. Marlowe, 1948。

近年 *Buddhist Temples of Kyoto and Kamakura*¹⁰ が出版され、同書中には本研究の対象寺院と重なるものがあるが、これは The Eastern Buddhist に掲載されたものを編集したものであって、後述のように同じ文章ではないことを明記しておく。同書序文には、“However there was an unfinished agenda, for as Suzuki Daisetsu¹¹ wrote in his preface; ‘This however does not contain all her writings on the subject, for we have besides those collected here a number of articles she wrote, for instance about Buddhist temples which she liked to visit and study. These will be grouped in another volume and published later, for they are excellent as a guide-book.’ Many decades later we are finally catching up with Suzuki Daisetsu’s promise.”¹² とあるが、これは「また来らん年にまとめて出版せんと思うものに「お寺詣」、「四季花見」とでも言うべきがある。」¹³ を指しているものと思われる。しかしながら、ガイドブックとして見る限り、『数十年の時を経て、遂に鈴木大拙の約束を果たすことが出来た』と豪語できるほどの内容ではない。むしろ、この *Rambles in Ancient Kyoto* のほうが、一般観光客向けであり、鈴木大拙の望むものではなかったかと思われるのである。

3. 掲載雑誌『ツーリスト』について

ジャパン・ツーリスト・ビューローにより発行された雑誌である。創刊は大正2 (1913) 年6月である。發刊之辭¹⁴には次のように意気込みが述べられている。(下線部筆者)

「烏兎早々、我がツーリスト・ビューローの創立せられてより、夙くも既に一年を経過しぬ。(中略) 如斯吾等の事業漸く其緒に就き、今や將に大に爲すあらんとするの時機到來せるを覺ゆ。此時に當り、吾等は我がビューローの會報を發刊し、内は以て會員相互の協同と、本部支部案内所等の聯絡とを謀り、外は以て我事業を江湖に知らしめ、且つ之が樞要を認めしむるは、敢て無益の業たらざるべきを信ず。(中略) 加之此事業たるや關係するところ頗る汎く、交通業、『ホテル』業を初めとし、或は外人相手の商店、或は名所舊跡、或は美術遊藝、或は避暑避寒の地等に涉りて攻究すべきあり、施設すべきあり、改善すべきあり

て、吾等の爲さんとし又爲さざるべからざるの事業、堆をなして我等を俟てり。自今會報『ツーリスト』を以て之を言議し、之を奨励し兼ねて又協同聯絡の資となさんとする亦決して徒爾ならざるべきを信ず。今茲に會報發刊に際し、我が事業に直接に間接に多大の同情を寄せられたる諸士に対し、謹んで感謝の意を表し、更に將來の誘助を祈り、顧みて我等一同益々奮勵努力せんことを期す、聊か以て發刊の辭となす。」

当初は隔月発行であったが、これはあくまでも原則に過ぎず、毎月発行の年もある。発行部数は明らかでない。英文欄が設けられたのは第3号からである。また、昭和11 (1936) 年7月号 (通巻第190号) から英文欄のみとなった。その理由として、日本人の間で観光が空前の発展を遂げたことにより、日本語欄を雑誌『旅』¹⁵ および『國際觀光』に合併するとしている¹⁶。最終号は昭和18 (1943) 年4月号である。和文・英文とも多くの寄稿家の名前が挙げられている¹⁷が、その中に Beatrice Lane Suzuki も鈴木琵琶子も含まれていない。和文については無償、英文についてのみ薄謝を呈した¹⁸とのことである。

4. Rambles in Ancient Kyoto 掲載号と掲載内容 (主な寺院名) について

(表-1)

PART	掲載号とページ	掲載内容 (主な寺院名)
I	1932年5月号 (通巻第140号) pp.7-12	銀閣寺, 法然院, 安楽寺, 靈鑑寺
II	1932年9月号 (通巻第144号) pp.37-43	真如堂 (極楽院), 黒谷 (金戒光明寺)
III	1933年7月号 (通巻第154号) pp.24-27	南禅寺, 光雲寺
IV	1934年2月号 (通巻第161号) pp.17-22	青蓮院, 知恩院
V	1934年9月号 (通巻第168号) pp.18-20	安養寺, 長楽寺, 雙林寺
VI	1934年9月号 (通巻第168号) pp.20-22	東大谷, 西大谷, 高台寺, 妙見堂
VII	1934年10月号 (通巻第169号) pp.26-29	清水寺
VIII	1935年2月号 (通巻第173号) pp.5-7	清閑寺, 正林寺, 妙法院, 智積院
IX	1935年5月号 (通巻第176号) pp.5-9	東福寺
X	1936年1月号 (通巻第184号) pp.34-38	泉涌寺, 即成就院
XI	1937年7月号 (通巻第202号) pp.17-23	六波羅蜜寺, 建仁寺

なお、PART I 及び II の英文タイトルは目次では *Rambles in Kyoto* となっており、本文のタイトルとは齟齬がある。そのため日本語の目次では「京洛逍遙」となり、それを PART XI まで踏襲しているが、*Rambles in Ancient*

Kyotoが正しい表記であり、日本語訳も「古都逍遥」とすべきではなかったかと思われる。寄稿文でもあり、薄謝しか進呈しなかったところから、校正に甘さが出たものであろう。

5. PART Iの記述内容と他のガイドブックとの比較

本研究においては、筆者所蔵の次のガイドブックを比較対象として用いることにした。

- ① 『日本案内記』近畿編上：参考文献6, “Rambles in Ancient Kyoto”と同年の1932年3月発行、5月までに7版を重ねた鐵道省のシリーズ第4弾。
- ② *A Handbook for Travellers in Japan (3rd ed.)*：参考文献7, いわゆる「マレーのハンドブック」で最終9版は1913年発行。訪日外国人必携のガイドブックであった。サトウ&ホウズからチェンバレン&メイスンに著者が変更された第3版。
- ③ *AN OFFICIAL GUIDE TO JAPAN*：参考文献8, 鐵道院の*AN OFFICIAL GUIDE TO EASTERN ASIA*（東亜英文旅行案内）¹⁹の改訂版。
- ④ *POCKET GUIDE TO JAPAN*：参考文献9, 國際觀光局が発行したものであるが、それ以前は鐵道省、ジャパン・ツーリスト・ビューロー、日本ホテル協会の三者名で発行されていた。
- ⑤ *Lonely Planet Kyoto*：参考文献10, ロンリープラネットの京都版第6版。以下ロンリープラネットと略す。
- ⑥ *Michelin The Green Guide Japan*：参考文献11, ミシュランのグリーンガイド。以下ミシュランと略す

(1) 掲載寺院名

Rambles in Ancient Kyoto (表-1参照)

記載の有無			
銀閣寺	法然院	安楽寺	靈鑑寺
○	○	○	○

- ① 『日本案内記』近畿編上²⁰

記載の有無			
銀閣寺	法然院	安楽寺	靈鑑寺
○	○	○	X

- ② *A Handbook for Travellers in Japan (3rd ed.)*

記載の有無			
銀閣寺	法然院	安楽寺	靈鑑寺
○	X	X	X

- ③ *AN OFFICIAL GUIDE TO JAPAN*

記載の有無			
銀閣寺	法然院	安楽寺	靈鑑寺
○	X	X	X

- ④ *POCKET GUIDE TO JAPAN*

記載の有無			
銀閣寺	法然院	安楽寺	靈鑑寺
○	X	X	X

- ⑤ ロンリープラネット²¹

記載の有無			
銀閣寺	法然院	安楽寺	靈鑑寺
○	○	X	○

- ⑥ ミシュラン

記載の有無			
銀閣寺	法然院	安楽寺	靈鑑寺
○	○	X	X

(2) 銀閣寺に関する英文ガイドブックの記述内容の比較 (語数と項目比較)

すべてのガイドブックに共通して掲載されているのは銀閣寺だけであるので、英和併記の銀閣寺のパンフレットにより各ガイドブックの内容比較を行った。チェックリスト右端の弄清亭ろうせい亭は香席（香道を行う部屋）で、明治28（1895）年に香座敷として再建されたものであり²²、鈴木は“the reproduction of Yoshimasa’s Incense Room”²³と記している。従って1891年発行の*A Handbook for Travellers in Japan (3rd ed.)*に記載がないのはやむを得ないが、1914年発行の*AN OFFICIAL GUIDE TO EASTERN ASIA*の改訂版である*AN OFFICIAL GUIDE TO JAPAN*に記載があるにもかかわらず、『日本案内記』になんらの記述がないのは後述のように資料調査不足であると思われる。また、銀閣寺のパンフレットには「弄清亭（香席）襖絵」とあり、作者に奥田元宋の名があるが、これは1996年に再建されたものである。明治の弄清亭ろうせい亭がどうなったかは明らかでない。

Rambles in Ancient Kyoto 744words

銀閣寺パンフレット記載の見どころチェックリスト							
銀閣	本堂	東求堂	銀沙灘	向月台	洗月泉	錦鏡池	弄清亭
○	○	○	○	○	○	○	○

(4) 安楽寺

Rambles in Ancient Kyoto 以外に記述があるのは①の『日本案内記』だけである。220年ほど続く夏の土用にカボチャを食する³⁴「カボチャ供養」が7月25日に行われることでも有名であるが⑤・⑥の現代の英文ガイドブックには取り上げられていない。

①『日本案内記』では199字で住蓮房、安楽房と松虫・鈴虫姉妹との関わり、承元の法難、本堂の説明、境内の説明を手際よく説明している。カボチャ供養は書かれていない。Rambles in Ancient Kyotoでは529wordsで詳しく述べているが、最初に「ここには住蓮、安楽の二僧と女官松虫、鈴虫の供養塔以外に見るべきものは少ない。」と言い切っており、「承元の法難」を詳述している。曰く、「今出川左大臣の二人の娘、19歳の松虫と17歳の鈴虫は後鳥羽上皇に寵愛された女房であったが、宮中の女房らから妬まれていた。上皇が熊野参詣に出て不在の折、清水寺に詣でた二人は帰途鹿ヶ谷の草庵で念仏と浄土の教えに接し、いたく感動し、かつ憂き世をはかなんで出家を願ったが浄土宗では救いを得るのに出家する必要はないとして即座に断られた。しかし、出家の願は固く、ある夜御所を抜け出し、住蓮、安楽に出家を乞い、叶わなければ死も厭わないとしたので、剃髪を受け、妙智・妙貞の法名を授けられ、紀伊の国粉河寺に逃れた。帰着した上皇の怒りは住蓮、安楽に向けられ、南都北嶺の衆徒からは浄土宗廃絶の訴えがなされ、承元³⁵元年に上皇の命により念仏停止が行われた。翌承元2年2月9日、住蓮、安楽はともに斬首。住蓮の辞世、「極楽に生まれむことのうれしさに 身をば佛にまかすなりけり」を“In the happiness of being reborn in the Pure Land, I give myself up to Amida.”、安楽の辞世、「今はただ 言う言の葉もなかりけり 南無阿弥陀仏のみ名のほかに」を“Now at this time, there is nothing to say, except ‘Namu Amida Butsu’”と英訳し、斬首の執行者、佐々木義実は「刀を下す際に『南無阿弥陀仏』と唱えた。友も敵も西方浄土に行かしめたまえ。」と記している。法然上人は土佐に、高弟親鸞聖人は越後に流された。」とし、「誠実な僧侶、美しく敬虔な女性の四つの魂に平和のあらんことを。」と結んでいる。その内容は参考文献として参照した安楽寺のホームページ³⁶、およびホームページ「京都風光」³⁷とは次のように異なる点が散見される。

(i) 承元（建永）の法難の年代確定について：『日本案内記』は承元2年とし、Rambles in Ancient Kyotoも住蓮、安楽が斬首されたのが承元2年2月9日であるとしている。これは西暦1208年2月26日にあたる³⁸。安楽寺のホームページはすべて建永としており、改元についての記述はない。2月9日も建永2年のこととしている。これだと西暦

1207年となる。どちらが正しいのか。近年の研究では建永の法難も承元の法難も1207年となっている。決め手になるのは後鳥羽上皇の熊野参詣であるが、「猪熊関白記」によれば建永元年12月9日出発、12月28日帰洛。翌建永2年2月9日の「明月記」には「近日只一向専修之沙汰、被擲取被拷問云々、非筆端之所及」とある³⁹。従って2月9日は承元2年でなく建永2年ということになる。ところで建永2年は10月25日に承元と改元されたが、この場合、同じ年の1月1日から承元となるのである。従って2月9日は承元元年でもある。それ故に建永の法難でもあり、承元の法難でもあると言えるのである。結局『日本案内記』もRambles in Ancient Kyotoも誤って承元2年としていることになるのだが、これが昭和7（1932）年頃の通説であったのかもしれない。

(ii) Rambles in Ancient Kyotoでは叙上のように松虫・鈴虫が紀伊の国粉河寺に逃れた、としているが安楽寺のホームページでは「生口島の光明防^マで念仏三昧の余生を送り」とし、ホームページ「京都風光」では「その後弾圧を恐れ紀州・粉河寺に身を隠した。法然一門の弾圧後、安芸国生口島光明三昧院に逃れ」としている。残念ながら両ホームページの記事はまったくの誤りであって、引野亨輔によれば、これは文化6（1809）年の光明坊の出開帳の目玉商品として造られた「松虫鈴虫両女之像」および文政3（1820）年の「国郡志御用下調べ帳」に初出する「ずさんな急造伝説」という⁴⁰。

(5) 霊鑑寺

すでに5.（1）の注21で述べたように、今回Rambles in Ancient Kyotoとの比較に用いたガイドブックの中で唯一霊鑑寺を取り上げているのがロンリープラネットである。ただし、寺の由来等は一切書かれていない。ここではRambles in Ancient Kyotoの記述を紹介するとともに補足のためにホームページ「京都観光ナビ」⁴¹および前掲「京都風光」を参考資料とする。

「霊鑑寺は尼門跡寺で、創建は堯然法親王の母⁴²でしばしば霊鑑寺御所と称せられ、皇室の紋章が壁紙や調度に見られる。秋の楓の紅葉はすばらしく高貴な尼僧のための静かな隠栖の場所であるとする。智証大師（円珍）作の浅浮彫の不動明王と北極星の神である黒木の妙見菩薩⁴³像がある。妙見菩薩はドラマチックな戦いのポーズをとり、左手は頭上に剣を持つ。注意しておかなければならないのは、仏教においては剣や炎の紋章を持つ菩薩は常に霊的な破壊を現しており、物的な破壊を現しているのではないという事である。人気のある不動明王もしばしば無知から「火の神様」とされるが、これも誤りである。不動明王の体の周

りの炎は手に持つ縄と同様に悪の欲望を破壊するものである。不動明王は怨深いものではなく、常に救いを求める人々が呼べば救ってくれるのであり、心のうちにある悪意を押さえつけるために憤怒の表情であるが、他の菩薩や明王と同様人間への愛がその内にある。」

仏教に関する解説はミシュランにも多く記されているが、Rambles in Ancient Kyotoのように場に即した解説の方がガイドブックとしては望ましいと考える。なお、ロンリープラネットにも記されていたが、春は後水尾天皇遺愛の「日光椿」を含む椿がすばらしく、昭和61年から新たに発足した「洛陽妙見十二支めぐり」では「卯=東」として靈鑑寺が含まれている。その他御所人形200体以上、皇室ゆかりの品々も多いとされる。

6. まとめと今後の課題

「逍遙」と題するだけあって、Part Iの寺院はほぼ一直線上に存在しており、PART Iを持参して現地踏査を実施したが、実に歩きやすかった。実用一辺倒のガイドブック

と異なり、逍遙の楽しみが得られるガイドブックと言えよう。また、現在では非公開となっている寺院内部、仏像なども詳しく紹介されており、本稿で紹介した菩薩・明王などについての説明など、内容の深さは読者の知的好奇心を刺激する読み物とも言える。鈴木琵琶子の視点はこれからの観光、あるいはガイドブックのあり方について考え直すのに有効な指針と言えるのではないかと。

Rambles in Ancient Kyotoが発表されてから80年以上が経過し、本稿で紹介した4寺院のうち、今では2寺院に限られた日にしか公開されていないが、どちらの寺院も観光客の関心を惹くような資源が多く認められた。こうした寺院に関しては、今後は寺宝や庭園の画像公開など、観光客、特にリピーターの興味を惹きそうな情報の開示を積極的に行い、質の高い観光が提供できるようにしていくことが必要ではないだろうか。

今回はRambles in Ancient Kyotoと著者の紹介を中心にまとめてみたが、次回以降は逍遙路を示しつつ内容紹介を行っていきたいと考える。

(注)

¹ 着工は平成22年10月、竣工は翌23年7月、開館は同年10月であった。

² 泉鏡花、徳田秋聲、室生犀星

³ 参考文献2 pp.175-176

⁴ 参考文献1 p.269, 原文は『青蓮仏教小観』, 鈴木大拙編 後記, 1940

⁵ 昭和14(1939)年7月18日7面

⁶ 肖像写真は『佛教と實際生活』, 鈴木ビヤトリス夫人述, 1933 による。

⁷ 結婚式は横浜領事館, 披露宴はホテルニューグランドで。媒酌人はサムライ商会の野村洋三。参考文献1 p.273

⁸ 参考文献1 p.285

⁹ NDLOPACによる。

¹⁰ 参考文献5

¹¹ 原文のまま。鈴木大拙は自身の署名にはDaisetzと記しているので本論文のタイトルもそれに合わせてある。

¹² 参考文献5 p.xi

¹³ 参考文献1 p.280, 原文は上記注4と同様『青蓮仏教小観』十一

¹⁴ 参考文献3 pp.90-93および参考文献4 pp.1-2

¹⁵ 創刊は大正13(1924)年4月。

¹⁶ 同号あとがき“TO OUR READERS”

¹⁷ 参考文献3 pp.94-95

¹⁸ 参考文献3 p.95

¹⁹ 1914年発行。鐵道院総裁(当時)後藤新平の女婿の鶴見祐輔が褒めちぎるほどの出来ではなかった点に付き、拙稿「戦前の英文ガイドブックに見る金沢(石川)の観光資源について」, 星稜論苑42号参照。

²⁰ 参考文献6 pp.195-196

²¹ 靈鑑寺の記事は「春秋のみに公開され、京都でもあまり人の訪れない場所である。春は咲き誇る椿、秋は目も眩むような楓の紅、工芸品のコレクション。年により公開日が変わるため、観光案内所に問い合わせること。」と極めて簡単である。

²² 「香席研究『東山泉殿香座敷絵図』をめぐって」, 岩崎正弥, 池坊短期大学紀要第30号, 2000

²³ 参考文献5 p.23では“a modern replica of Yoshimasa's charming incense room”と表現している。

²⁴ Island of White Cloudと書かれているので鶴を雲と誤読した可能性もなしとは言えない。

²⁵ 明光である。

²⁶ 観音菩薩は単にKwannonでなくBodhisattva Kwannon, 像の後ろの光背もmandoroと表記している。光背については講談社の英文

日本大事典（1993）ではmandorlaとなっている。

²⁷ <http://www.kyoto-arc.or.jp/News/s-kouza.html> 京都市考古資料館文化財講座第262回 2015年2月28日 アクセス2018.2.15

²⁸ 昭和7（1932）年当時。古社寺保存法（1897）もしくは国宝保存法（1929）による。現在はすべて重要文化財となっている。

²⁹ 参考文献10, p.26

³⁰ 講堂

³¹ 参考文献10, p.96

³² *Fujimusume* (clematis) としているが、品種名であろう。

³³ 谷崎潤一郎（1886-1965）。「陰翳礼讃」は1933年発表。

³⁴ 筆者の調査した限りでは、土用に食するものでカボチャがあるのは日本全国でここだけである。詳しくは拙稿「土用丑の日の『丑湯』と『丑湯祭り』について—風習に観光資源評価を加える—」, 星稜論苑第39号, 2011参照。

³⁵ first year of Shogenと記されている。「しょうげん」とも言う日本国語大辞典にある。

³⁶ <http://anrakuji-kyoto.com/anrakuji.html> アクセス2018.2.16

³⁷ <https://kyotofukoh.jp/report463.html> アクセス2018.2.16

³⁸ <http://keisan.casio.jp/exec/system/1239884730> 和暦から西暦変換（年月日） アクセス2018.2.16

³⁹ 「専修念仏者禁制について」, 中井真孝, 佛教大学歴史学部論集第5号, 2015, pp.10-11

⁴⁰ 「偽書の地域性/偽証の歴史性—生口島の法然伝説を事例として—」引野亨輔, 福山大学人間文化学部紀要第5巻, 2005, pp.50-53

⁴¹ <https://kanko.city.kyoto.lg.jp/detail.php?InforKindCode=1&ManageCode=1000240> アクセス2018.2.16

⁴² 持明院基子（生年不詳～1644）。「京都観光ナビ」・「京都風光」では後水尾天皇の皇女多利宮となっている。

⁴³ 日本国語大辞典では「諸説あるが、一般には北極星を神格化したもの」とし、改修言泉では「本地は北斗星」とする。「京都風光」では曖昧に「北極星・北斗七星を神格化したもの」としている。

（参考文献）

- 1 新編増補 大拙の風景—鈴木大拙とは誰か— 岡村美穂子・上田閑照, 2008
- 2 真人鈴木大拙, 岩倉政治, 法蔵館, 1988
- 3 回顧録, ジャパン・ツーリスト・ビューロー, 1937
- 4 ツーリスト, ジャパン・ツーリスト・ビューロー, 1913
- 5 *Buddhist Temples of Kyoto and Kamakura*, Beatrice Lane Suzuki; edited by Michael Pye, Equinox Publishing Ltd, 2013
- 6 日本案内記, 鐵道省, 1932
- 7 *A Handbook for Travellers in Japan (3rd ed.)*, B. H. Chamberlain & W. B. Mason, 1891
- 8 *AN OFFICIAL GUIDE TO JAPAN*, The Japanese Government Railways, 1933
- 9 *POCKET GUIDE TO JAPAN*, Board of Tourist Industry, 1935
- 10 *Lonely Planet Kyoto*, Chris Rowthorn, Lonely Planet Publications Pty Ltd, 2015
- 11 *Michelin The Green Guide Japan*, Michelin Travel Partner, 2017

